



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	看護系三年制短期大学卒業生の実態に関する調査：北海道大学医療技術短期大学部看護学科とその前身の看護学校卒業生の活動状況の比較
Author(s)	堀口, 雅美; Horiguchi, Masami; 本間, 裕子 他
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 4, 1-11
Issue Date	1991-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37534
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_1-12.pdf



看護系三年制短期大学卒業生の実態に関する調査

——北海道大学医療技術短期大学部看護学科と
その前身の看護学校卒業生の活動状況の比較——

堀口 雅美・本間 裕子・佐野 文男・伊東 和子*

An investigation on the graduates from the college of nursing.

—— A comparison on working state between the graduates
from Department of Nursing, College of Medical Technology,
Hokkaido University and the under-graduates
from Nursing School belong to Department of Medicine. ——

Masami Horiguchi, Hiroko Honma, Fumio Sano and Kazuko Ito*

Summary

We conducted a questionnaire survey in order to compare the overall outcome of the people who finished the present Junior College, Nursing Division with those who finished its forerunner the Nursing School of the Hokkaido University. The purpose of this survey was to grasp the extent of their social contribution.

At the time of the survey those with jobs, and who finished Junior College amounted to approximately 90%, and those with special training at Specialized Schools came to 60% and largely consisted of nurses, public health nurses and midwives. Further it was found that 85% of the trainers found jobs in Hokkaido. After graduation those who chose to go on for further education comprised 40% of all Junior College and Special Training Schools. These people largely went on to study to gain qualifications for Health Nurse or Midwives.

From the above results, it was clearly ascertained that both Junior College Graduates and Special Training School trainers clearly contributed to their localities after finishing school. Thus, further educational training should be considered for these special future, in view of the importance and demand, not to mention the lacking of such highly trained and specialized personnel.

要 旨

本学看護学科(短期大学)卒業後1～7年目381名(回収率79.0%)と本学前身の看護学校(専

修学校)卒業後8～12年目107名(回収率63.7%)の卒業生を対象に、社会的貢献度を把握するため、郵送による質問紙調査法を実施した。調査時点での就業状況は、有職者が短期大学

北海道大学医療技術短期大学部看護学科

* 東京医科歯科大学医学部保健衛生学科

Department of Nursing, College of Medical Technology, Hokkaido University

* Tokyo Medical and Dental University School of Allied Health Sciences

約90%、専修学校約60%おり、その多くは看護婦、保健婦、助産婦であった。また、卒業後の経験職種として短期大学・専修学校共に96%以上の者が看護関係の仕事を経験し、さらにその就業経験地域の約85%が北海道内であった。卒業後に進学した者は、短期大学・専修学校共に40%程度で、その多くは保健婦・助産婦資格取得のための入学であった。学会などに所属している者は、短期大学約70%、専修学校約50%であった。

以上の結果から、短期大学・専修学校いずれの卒業生も地域への貢献度は高いが、今後専門職者としての卒後教育の継続について検討が必要と考えられた。

I. 緒 言

近年の急速な高齢化社会の到来や疾病構造の変化に伴い、医療に求められる内容にも変化が生じてきている。診断や治療技術の進歩と共に、医療従事者の中では「全人的医療」が叫ばれている。看護職にも看護教育を含めた質的向上がより一層望まれている。現在わが国では看護の基礎教育を四年制とすることが課題となっており、本学看護学科においては、平成元年度より四年制問題検討委員会を中心に、「四年制化に向けてまず卒業生の社会的貢献度を把握することが必要である」との見解が示された。

また看護職者の不足も言われている現在、看護職の就業状況から、今後の方向性や対策を行政などの関連方面に積極的に働きかけていくことも必要となろう。

そこで今回、本学看護学科と本学前身の看護学校の卒業生を対象に、卒業後の活動分野や研究・研修の実状を郵送による調査から把握し、将来の四年制化ならびに関係団体へ働きかけるための基礎的資料を得ることを目的とした調査研究を行ったので報告する。

II. 調査方法

1. 調査対象

本学看護学科第1回(卒後7年目)から第7回(卒後1年目)卒業生522名(以後、短期大学とする)と本学前身看護学校第29回(卒後12年目)から第33回(卒後8年目)卒業生(以後、専修学校とする)203名の合計725名のうち、調査が可能な短期大学482名と専修学校168名の合計650名を調査対象とした。回答者の総数は488名で、有効回収率は短期大学79.0%(381名)、専修学校63.7%(107名)、全体では75.1%であった。各卒業年次ごとでは、短期大学47~65名、専修学校19~26名の回答を得た。

2. 調査方法ならびに調査期間

別紙調査票(付表1)を作成し、郵送による質問紙調査法を行った。調査期間は平成2年8月~10月である。

III. 調査結果

1. 調査対象の概要

平均年齢は短期大学 24.4 ± 0.01 歳、専修学校 30.0 ± 0.03 歳、性別は短期大学に男性2名がいたが、他は全て女性であった。卒業生の婚姻状況は、未婚者が短期大学で81.1%であったのに対し、既婚者は専修学校では71.0%であった(表1)。

次に平成2年8月1日現在の就業状況は、有職者は短期大学で79.5%、専修学校で56.1%であった。無職のうち、現在学生であるものは短期大学10.2%(39名)、専修学校0.9%(1名)含まれていた(表2)。有職者の内訳は看護婦、保健婦および助産婦を合わせると、短期大学95.3%、専修学校91.7%であった(図1)。またこの時の就業地域を見てみると短期大学、専修学校共に札幌市内が60%以上で、有職者全体の85%以上が北海道内に就業していた(表2)。

表1 卒業生の婚姻状況と同居家族の有無

		短期大学 人 (%)	専修学校 人 (%)	計 人 (%)
婚姻状況	未婚	309 (81.1)	29 (27.1)	338 (69.3)
	既婚	70 (18.4)	76 (71.0)	146 (29.9)
	離婚または別居	2 (0.5)	2 (1.9)	4 (0.8)
	計	381 (100.0)	107 (100.0)	488 (100.0)
同居家族	あり	200 (52.5)	85 (79.4)	285 (58.4)
	なし	181 (47.5)	22 (20.6)	203 (41.6)
	計	381 (100.0)	107 (100.0)	488 (100.0)

表2 平成2年8月1日現在の就業状況とその地域

		短期大学 人 (%)	専修学校 人 (%)	計 人 (%)
就業状況	有職	303 (79.5)	60 (56.1)	363 (74.4)
	無職 (学生含む)	78 (20.5)	47 (43.9)	125 (25.6)
	計	381 (100.0)	107 (100.0)	488 (100.0)
就業地域	札幌市内	192 (63.4)	40 (66.7)	232 (63.9)
	札幌市外で北海道内	68 (22.4)	16 (26.7)	84 (23.1)
	北海道外	43 (14.2)	4 (6.7)	47 (12.9)
	計	303 (100.0)	60 (100.0)	363 (100.0)

2. 卒業後の進路

卒業後に就業経験のある者は短期大学87.9% (335名)、専修学校99.1% (106名)であった。そして卒業後現在までに経験した職種をみると、短期大学、専修学校共に看護婦として働いたことのある者が72%で、これに保健婦と助産婦を合わせると、両群共に96%以上が看護に関する職種に就業していた(図2)。また就業経験地域は先に述べた「平成2年8月1日現在の就業地域状況」とほぼ同じであった。就業経験施設では、病院が70%以上を占め、以下、保健所や役場、事業所の順となっていた(表3)。

仕事に対する主な期待では、短期大学、専修学校共に「自分自身の成長」と答えた者が約50%と最も多く、次に「資格を生かすことができる」、「報酬を得ること」となっていた(図3)。実際の仕事の中で主に満足している内容は、「知識を習得できる」「自分の能力を生かしている」ことなど専門職者としての満足感が最も多く挙げられ、短期大学で31.3%、専修学校41.9%であった。「人間関係が良好である」ことに最も満

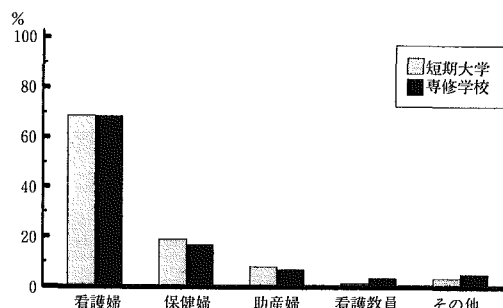


図1 平成2年8月1日現在の有職者の職種内訳

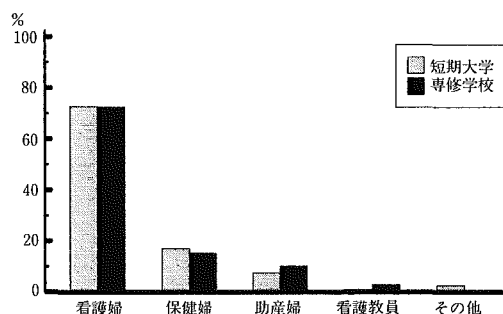


図2 卒業後の経験職種 (複数回答あり)

足している者は短期大学で22.0%，専修学校で10.5%，ついで「社会に貢献している」「他者から感謝される」ことなど，看護職としての役割期待に答えていることを挙げた者が各々17.0%，12.4%であった。「余暇や趣味の時間がもてる」「報酬がよい」ことなど労働条件に関することを第一に挙げている者は，短期大学で14.0%，専修学校で10.5%であった。「満足はない」「不明，その他」は短期大学15.8%，専修学校24.8%となっていた（図4）。

転職あるいは退職経験のある者は短期大学35.8%（120名），専修学校75.5%（80名）で，その主な理由を質問したところ，「健康上の理由や家庭の事情」を挙げた者が短期大学では50.0%，専修学校で67.5%であった。ついで「進学するため」「他に自分の能力を伸ばしたい」など自己の可能性を広げるために転職・退職した者は，短期大学では25.0%（30名），専修学校で12.5%（10名）となっていた。また「職場の人間関係への不満」「能力に限界を感じた」など労働環境を理由に挙げた者が，短期大学，専修学校共に約11%であった。「休暇が十分に取れない」あるいは「報酬が低い」「仕事が多すぎる」など実際の労働条件の悪さを理由に挙げた者はごくわずかであった（図5）。

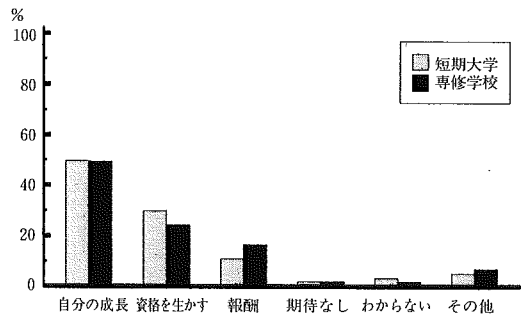


図3 仕事に対する主な期待

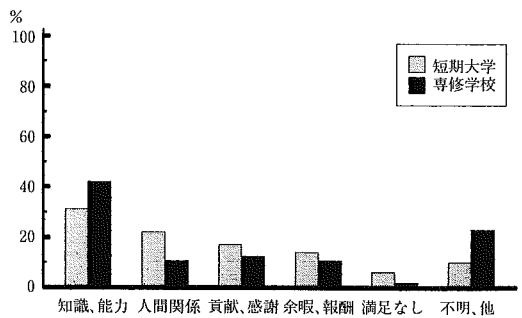


図4 仕事に対する主な満足

3. 卒業後の教育体制

卒業後進学経験のある者は短期大学42.5%，専修学校33.6%で，進学先で最も多いのは保健婦・助産婦資格取得のための入学であった（表4）。なお，進学先で短期大学の「その他」に大学進学と保健婦・助産婦資格取得の両方に進ん

表3 卒業後の就業経験地域と施設（複数回答あり）

		短期大学 人 (%)	専修学校 人 (%)	計 人 (%)
就業経験地域	札幌市内	234 (61.9)	80 (63.0)	314 (62.2)
	札幌市外で北海道内	88 (23.3)	34 (26.8)	122 (24.2)
	北海道外	56 (14.8)	13 (10.2)	69 (13.7)
	計	378 (100.0)	127 (100.0)	505 (100.0)
就業経験施設	病院	290 (81.2)	90 (70.9)	380 (78.5)
	保健所・役場	51 (14.3)	19 (15.0)	70 (14.5)
	事業所	2 (0.6)	4 (3.1)	6 (1.2)
	学校	1 (0.3)	3 (2.4)	4 (0.8)
	その他	13 (3.6)	11 (8.7)	24 (5.0)
計	357 (100.0)	127 (100.0)	484 (100.0)	

看護系三年制短期大学卒業生の実態に関する調査

表4 卒業後の進路

		短期大学 人 (%)	専修学校 人 (%)	計 人 (%)
進学経験	あり	162 (42.5)	36 (33.6)	198 (40.6)
	なし	219 (57.5)	71 (66.4)	290 (59.4)
	計	381 (100.0)	107 (100.0)	488 (100.0)
進学先	大学進学	12 (7.4)	4 (11.1)	16 (8.1)
	保健婦・助産婦資格 取得のための入学	137 (84.6)	25 (69.4)	162 (81.8)
	その他	13 (8.0)	7 (19.4)	20 (10.1)
	計	162 (100.0)	36 (100.0)	198 (100.0)

表5 卒業生の進学に関する希望

		短期大学 人 (%)	専修学校 人 (%)	計 人 (%)
一般大学への進学希望	あり	204 (53.5)	59 (55.1)	263 (53.9)
	なし	169 (44.4)	40 (37.4)	209 (42.8)
	進学した	8 (2.1)	8 (7.5)	16 (3.3)
	計	381 (100.0)	107 (100.0)	488 (100.0)
看護系大学への進学希望	あり	105 (27.6)	31 (29.0)	136 (27.9)
	なし	274 (71.9)	76 (71.0)	350 (71.7)
	進学した	2 (0.5)	0 (0.0)	2 (0.4)
	計	381 (100.0)	107 (100.0)	488 (100.0)
看護系大学3年次への編入学希望	あり	26 (6.8)	6 (5.6)	32 (6.6)
	なし	336 (88.2)	101 (94.4)	437 (89.5)
	編入学した	5 (1.3)	0 (0.0)	5 (1.0)
	未回答	14 (3.7)	0 (0.0)	14 (2.9)
	計	381 (100.0)	107 (100.0)	488 (100.0)

だ者7名を含めた。短期大学、専修学校いずれも、大学に進学した者のほとんどが夜間あるいは通信大学であり、短期大学で看護系3年次に編入学をした者は5名であった。進学の動機では「勉強したい」「教養を身につける」ということが多く、本学卒業後に進学を考えたものがほとんどであった。

資格取得のための入学をした者で、保健婦のみの資格取得者が、短期大学、専修学校共に60%以上で、「資格を生かして仕事をしたい」という動機が約半数を占めていた。資格取得を考えた時期は、短期大学、専修学校共に本学在学中が60%以上であった。

卒業生の進学希望状況に関して、短期大学と専修学校を合わせてみると、一般大学への進学

希望は53.9%、看護系大学へは27.9%であった。さらに看護系大学3年次への編入学の希望は6.6%であった(表5)。

4. 卒業後の研究・研修活動

平成2年8月1日現在学会あるいは協会の会員になっている者は、短期大学68.2%(260名)、専修学校54.2%(58名)であった。所属している団体の80%以上が日本看護協会であり、看護系の学会に所属しているのは約10%であった(図6)。学会あるいは協会で発表経験のある者は卒業後1～7年目の短期大学では18.3%(26名中47名)、卒業後8～12年目の専修学校では61.4%(58名中35名)であり、半数以上に発表経験があった。共同研究者として最も多いのは、

表6 研修受講状況とその動機

		短期大学 人 (%)	専修学校 人 (%)	計 人 (%)
研修受講経験	あり	195 (51.2)	94 (87.9)	289 (59.2)
	なし	171 (44.9)	13 (12.1)	184 (37.7)
	未回答	15 (3.9)	0 (0.0)	15 (3.1)
計		381 (100.0)	107 (100.0)	488 (100.0)
受講の動機	内容に興味があった	94 (48.2)	44 (46.8)	138 (47.8)
	人から勧められて	52 (26.7)	29 (30.9)	81 (28.0)
	日頃勉強できない	15 (7.7)	4 (4.3)	19 (6.6)
	受講するのが当然	11 (5.6)	3 (3.2)	14 (4.8)
	講師に関心があった	8 (4.1)	1 (1.1)	9 (3.1)
	教員志望	2 (1.0)	1 (1.1)	3 (1.0)
	その他	13 (6.7)	12 (12.8)	25 (8.7)
	計	195 (100.0)	94 (100.0)	289 (100.0)

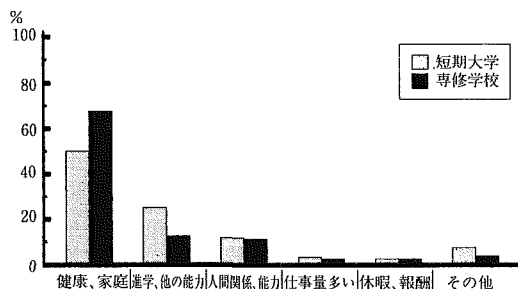


図5 転職あるいは退職の主な理由

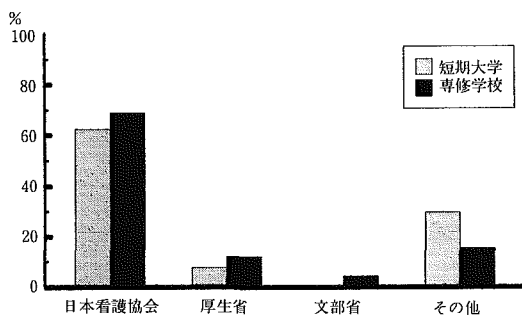


図6 研修の主催団体 (複数回答あり)

同僚、ついで婦長・副婦長であり、また学会発表に対する意欲では、「いつも思う」「ときどき思う」者を合わせると50%以上となっていた。

研修受講状況では、専修学校の方が受講経験のある者が多く、受講の動機では「興味があった」ことを挙げているものが半数近くを占めて

いた(表6)。また研修の主催は日本看護協会によるものが最も多かった(図6)。

IV. 考 察

昨年、本学看護学科は開学10周年を迎えたが、これまで卒業生の動向に関する調査は実施されていなかった。そこで今回、まず卒業生を対象に卒業後の活動状況を把握することを目的に調査研究を行った。

短期大学と本学前身の専修学校の卒業生との比較を試みたわけだが、就業状況やその地域、施設などのほとんどの質問で、各々の卒業生の間での違いはみられなかった。このことは、短期大学と専修学校では専門教育が重視されていることから、看護職という専門性の高さが優先された結果なのではないかと思われる。看護系は他の分野に比べ、短期大学と専修学校いずれの学校に入学しても、すでに学生時代からある程度は卒業後どの領域に進むか定まっている場合が多く、その理由としては卒業時に資格を得られることが大きいであろう。さらに、専修学校から短期大学になっても看護系の職種に従事する者に差がないということは、高学歴化に向かうことが必ずしも看護職の就業率の低下に直結するとは限らない。高学歴化により看護職の就業率の低下を危惧する声も一部にはあるが、

危ぶむよりは四年制化の目的を進めていく方が先決であると考え。

国立大学医療技術短期大学部看護学科の昭和55年度の卒業生を対象にした村上ら¹⁾の調査によると、7年後の就業率の平均は72.2%であった。今回の調査で卒後8年から12年目の専修学校卒業生は、就業率が56.1%と減少しているが、卒後10年以降が結婚・出産・育児などで退職する一つの転換期と考えてよいだろう。また大阪大学医療技術短期大学部看護学科の昭和45年度から10年間の卒業生を対象とした阿曾ら²⁾の調査によると、就業経験は97.9%で、その職種の内訳は、看護婦51.0%、保健婦11.8%、助産婦8.0%で、学校関係に勤めている者もいた。今回の調査でもその報告と同様であるが、本学看護学科の場合、病院や保健所・役場というように就業施設は限定されているものの、就業地域が北海道内に圧倒的に多いことから、国立の短期大学として地域への貢献度は高いと考えてよいであろう。札幌市内に就業する者が60%を越えるのも地方都市集中型として現在の若者の傾向を反映している。

その反面、北海道外で就業する者が少ないということは国際的な視野で活躍する人材の育成という点で問題となろう。短期大学卒業生でわずかではあるが、道外に就業する者が増加傾向にあるのは、活動範囲の広がることで様々な刺激にふれる機会も増え、質の充実にもつながっていくことと思われる。

ところで一般に看護のやりがい感として、自己実現や自我達成欲求を満たされること、教育・研究の場が保証されていること、労働条件や労働環境が整備されていることなどが挙げられる。今回の調査結果で仕事に対する期待で最も多いのが、「自分自身の成長」であったことは専門職者の自律性を求めていると考えられる。この自律性は「四年制大卒は高く、専修学校と短期大学との差はない」と香春³⁾は報告しているが、今後他大学との比較も必要である。続い

て仕事で満足している内容では「知識を得る」「能力を生かしている」などの自己成長に関する回答が1位であることは自律性との関連で当然だと思われる。

しかし、短期大学卒業生では31.3%と期待の高さに比べると満足度は比例しない。これはまだ20代と若く、経験の少なさから現実が追いつかない状況のように思われる。次に「資格を生かす」ことの期待で、専門職としての誇りと自信をもって看護職をつとめたいという意欲がうかがわれるが、役割期待の満足度はあまり高くなく、「報酬・余暇」などの労働条件と同じ程度である。

転職・退職の理由の中で、過重労働の軽減や余暇の希望を合わせても約5%に満たない。これは看護婦給与が夜勤手当や超過勤務手当により20代前半では女子大卒より、20.3%も上回り、30代前半まで同額の水準を保てることが影響しているであろう。転職・退職の理由の中で最も多いのは「家庭の事情」「健康上の理由」であり、結婚・出産・育児などで退職せざるを得ない状況がうかがわれる。このことは種々の雇用条件を提供するといった労働環境を整えていくことが、看護婦不足を解決する一端になるものと考えられる。

他の可能性を目指して、転職・退職する者は専修学校卒業生より、短期大学卒業生が26%と多いが、一つの職場で経験年数を重ねるより、容易に職場を変更しやすい傾向がうかがえる。「能力の限界」「人間関係」などの理由は職場環境の悪さもさることながら、適応能力の不足、つまり他者との関わりの中で自己を変容させていくような自律性も求められるのではないだろうか。近田⁴⁾は1～3年間で転職する理由を、「実習場で職業的魅力が見つけれず、不向きではないかと多くの不安を抱きながら、とにかく適応できそうな職場を選ぶこと」など学生時代からその傾向があると述べている。今回の調査結果からも、特に短期大学卒業生で満足して

いることとして「人間関係」を第一に挙げた者が22%もあり、職場での人的環境も重要になっていることを示唆している。

看護職に従事する者の多くが女性であり、結婚・妊娠・出産といったライフサイクルに関連したことで転職・退職者が増加することは今回の調査でも明らかになったが、そのような、いわば外的な要因と合わせて、個人の仕事に対する意欲といった内的な要因にも目を向けてみる必要があるのではないかと思われる。専門職としての自律性を自他ともに認められることがさらに看護職の継続につながるのではないだろうかと考える。研修受講の動機を見ても、興味はあるが、「人から勧められて」という動機が次に多いことから、自分自身は何を学習したいのかその内容が漠然としたものになっているような一面もうかがえる。

仕事に従事している、いないに関わらず、卒業後も何らかの形で教育が継続されていくことが看護職全体の質の向上につながり、それはやはり四年制大学で行われることがその本来の目的にも合致し、最良と考えられる。資格取得のために卒業後さらに一年間教育を受けた卒業生が短期大学で84.6%、専修学校で69.4%いたが、同じ四年間の教育期間でも資格取得を第一に考えて教育されている場合と四年制とでは教育目的も自ずと異なってくる。大学への進学希望状況の結果からは、実際に短期大学の卒業生が可能な「看護系大学3年次編入学への希望」が最も少なかった。このことは制度としては現在あるが、その定員枠が非常に少ないこと、また地域が首都圏に限られていることが原因として考えられる。現在の就業状況から地域への貢献度が高いといえるが、将来はさらに発展的な学習を積み重ねていくことができるような教育体制を整えていくことが重要である。

短期大学と専修学校との間に教育内容に多少の差はあれ、医療従事者養成を教育目的の一つとしている限り、就業状況や仕事への期待や満

足度、転職・退職の理由に大きな違いは見られない。しかし短期大学の教育では、看護を専門的学問分野として教育・研究できるような人材を育てている。今回は実態を把握するために行ったので、今後は卒業年次別の時系列を含めた検討や卒後教育に関する意識調査、さらには四年制大学卒業生との比較検討を課題としていきたい。

V. ま と め

短期大学と専修学校の卒業生488名を対象に質問紙調査法を実施し、以下の結果を得た。

1. 平成2年8月1日現在の就業率は短期大学79.5%、専修学校56.1%であった。卒業後、短期大学、専修学校共に95%以上の者が看護に関する仕事に従事していた。
2. 就業地域は、短期大学、専修学校共に札幌市内に勤めている者が約65%で、就業施設では病院、保健所・役場が大部分であった。
3. 仕事への期待は「自己の成長」と回答した者が最も多く、短期大学、専修学校共に50%を越えた。仕事で満足している内容では「知識を習得できる」「自分の能力を生かしている」など専門職者としての満足感が最も多かった。
4. 転職・退職した者で最も多い理由は「家庭の事情」「健康上の理由」で短期大学50%、専修学校67.5%であった。
5. 卒業後進学経験のある者は短期大学42.5%、専修学校33.6%で、その大部分は保健婦・助産婦資格取得のための入学であった。

以上のことから、短期大学あるいは専修学校のみでの教育では多くの課題が残り、看護系四年制大学への指向が認められた。

謝辞

この研究にあたり、ご協力をいただきました北海道大学医学部衛生学講座、斎藤和雄教授に心より深謝いたします。また資料作成にあたり、北海道大学大学院環境科学研究科大学院生、伊藤和弥氏に感謝いたします。

- 2) 阿曾洋子, 上原ます子, 大巻悦子他: 医療技術短期大学部看護学科卒業生の継続看護に関する意識, 看護展望, 11(12), 1166-1172, 1986.
- 3) 香春知永: 看護教育プログラムの評価—日本における研究事例一, 看護研究, 23(1), 77-88, 1990.
- 4) 近田敬子: 看護ニーズの増大の中で基礎教育が目指すもの, 病院, 49(5), 401-403, 1990.

引用文献

- 1) 村上生美, 原萃子, 内海滉: 国立医療技術短期大学部看護学科卒業生の学習意識, 日本看護研究学会抄録, 12(臨), 152, 1989.

【付表1】

卒業生動向調査 調査票

北海道大学医療技術短期大学部看護学科 卒業生動向調査研究班

- 問1. あなたの年齢はおいくつですか。 () 歳
- 問2. あなたの性別を教えてください。 1. 男性 2. 女性
- 問3. あなたの平成2年8月1日現在の婚姻状況をきかせてください。
1. 未婚 2. 既婚 3. 離婚または別居 4. 死別
- 問4. 同居家族はいますか。 1. いる 2. いない
- 問5. あなたの平成2年8月1日現在の職業を教えてください。
1) 職種をきかせてください。
1. 看護婦 2. 保健婦 3. 助産婦 4. 養護教諭
5. 短大もしくは看護学校教員 6. 学生 7. 無職 8. その他 ()
- 2) 就業先の地域はどこですか。
1. 札幌市内 2. 札幌市外で北海道内(支庁名) 3. 北海道外(都府県名)
- 問6. 本学卒業後、就職したことはありますか。
1. ある 2. ない→(「2. ない」と答えた方は問15.に進んでください。)
- 問7. これまでに経験したことのある職種を教えてください。(複数回答可)
1. 看護婦 2. 保健婦 3. 助産婦 4. 養護教諭
5. 短大もしくは看護学校教員 6. その他 ()
- 問8. 就職したことのある地域を教えてください。(複数回答可)
1. 札幌市内 2. 札幌市外で北海道内(支庁名) 3. 北海道外(都府県名)
- 問9. 勤務した年数をきかせてください。
1 回目の就職先 () 年 () 月
2 回目の就職先 () 年 () 月
3 回目の就職先 () 年 () 月
- 問10. 勤務したことのある施設を教えてください。(複数回答可)
1) 1. 病院 2. 保健所・市町村役場 3. 事業所 4. 学校 5. その他 ()
2) その時に役職についていたことがある場合は記入してください。
(例: 婦長, 副婦長, 主任, 係長, 課長, 主任技師など) { }
- 問11. 病院に勤務した経験のある方で、最も最近勤務した病院についておたずねいたします。(看護婦, 保健婦, 助産婦いずれの職種でも可)
1) 設立を教えてください。
1. 国・公立大学附属病院 2. 私立大学附属病院 3. 国・公立病院
4. 民間病院(医療法人) 5. 診療所 6. その他
2) 病床数をきかせてください。
1. 100床未満 2. 100床以上 500床未満 3. 500床以上
3) あなたのいる病棟は基準看護をとっていますか。
1. 特3類 2. 特2類 3. 特1類 4. 1類 5. 2類
6. 3類 7. 4類 8. とっていない 9. わからない
- 問12. あなた自身は仕事に対してどのようなことを期待していますか。(主なもの1つ)
1. 資格を生かすことができる 2. 自分自身の成長 3. 報酬を得ること
4. 期待はない 5. わからない 6. その他 ()

- 問 13. 最近の仕事について最も満足していることは何でしょうか。(主なもの1つ)
1. 知識を習得できる
 2. 報酬がよい
 3. 職場の人間関係が良好である
 4. 社会に貢献している
 5. 余暇や趣味の時間がもてる
 6. 自分の能力を生かしている
 7. 他の人から感謝される
 8. 満足していることは1つもない
 9. 仕事をしていないのでわからない
 10. その他 ()
- 問 14. 転職あるいは退職を経験した方におたずねいたします。その主な理由を1つ教えてください。
1. 健康上の理由から
 2. 休暇が充分にとれない
 3. 職場の人間関係への不満 (差しつかえなければ次のいずれかに○をつけてください。)
 - { 上司 同僚 医師 婦長 副婦長 他 }
 4. 自分の能力に限界を感じた
 5. 家庭の事情により (次のいずれかに○をつけてください。)
 - { 結婚 出産 育児 介護 他 }
 6. 仕事の割に報酬が低い
 7. 仕事の量が多すぎる
 8. 進学するため
 9. 他に自分の能力を伸ばしたい
 10. その他 ()
- 問 15. 本学卒業後、さらに進学しましたか。
1. 進学した
 2. 進学しない→〔2. 進学しない〕と答えた方は問 19. に進んでください。
- 問 16. 進路を教えてください。
1. 大学進学
 2. 保健婦・助産婦資格取得のための入学
 3. その他の資格取得のための入学 (資格名)
- 問 17. 大学進学をされた方におたずねいたします。
- 1) 進学先を教えてください。(複数回答可)
 1. 一般大学 (学部)
 2. 看護系大学3年次編入学
 3. 夜間大学 (学部)
 4. 通信教育(専攻)
 5. 大学院進学 (修士)
 6. その他 ()
 - 2) 進学した動機をきかせてください。(主なもの1つ)
 1. 興味があった
 2. 学歴が必要と思った
 3. 教員になりたいため
 4. 深く勉強したいと思った
 5. 大学にあこがれて
 6. 広く教養を身につけるため
 7. その他 ()
 - 3) いつ頃から大学進学を考え始めましたか。
 1. 本学 入学前
 2. 本学 在学中
 3. 本学 卒業後
 4. わからない
- 問 18. 保健婦・助産婦資格取得のための入学をされた方におたずねいたします。
- 1) 取得された資格を教えてください。
 1. 保健婦のみ
 2. 助産婦のみ
 3. 保健婦・助産婦の両方
 - 2) 資格取得をめざした動機を教えてください。(主なもの1つ)
 1. 資格を生かして仕事をしたいと思った
 2. 看護婦とは違う仕事をしたかった
 3. より報酬の高い方がよいと思った
 4. 夜勤をしたくない
 5. その他 ()
 - 3) いつ頃から資格取得を考え始めましたか。
 1. 本学 入学前
 2. 本学 在学中
 3. 本学 卒業後
 4. わからない
- 問 19. 本校卒業後、一般大学に進学したいと思ったことはありますか。
1. ある
 2. ない
 3. 実際に進学した
- 問 20. 本校卒業後、看護系大学に進学したいと思ったことはありますか。
1. ある
 2. ない
 3. 実際に進学した
- 問 21. 本校卒業後、看護系大学3年次編入学を希望したことはありますか。
1. ある
 2. ない
 3. 実際に編入学した
- 問 22. 平成2年8月1日現在、学会あるいは協会の会員になっていますか。
1. なっている
 2. なっていない
- 問 23. 学会員あるいは協会員になっている方におたずねいたします。
- 1) 所属している団体を教えてください。(複数回答可)
 1. 日本看護科学学会
 2. 日本看護研究学会
 3. 日本公衆衛生学会
 4. 日本学校保健学会
 5. 日本母性衛生学会
 6. 日本看護協会
 7. その他 ()
 - 2) これまでに学会で発表したことはありますか。(共同研究者も含む)
 1. ある (回)
 2. ない
 - 3) 演者になったことはありますか。
 1. 演者になったことがある
 2. 演者になったことはないが、共同研究者になったことはある
 3. 演者になったことはない
 - 4) どのような立場の人と共同研究を行ったことがありますか。(複数回答可)
 1. 婦長・副婦長
 2. 同僚
 3. 医師
 4. 上司
 5. 本学教官
 6. 本学以外の教官
 7. その他 ()
- 問 24. 日頃の仕事を学会に発表しようと思ったことはありますか。
1. いつも思う
 2. とときどき思う
 3. 思わない

看護系三年制短期大学卒業生の実態に関する調査

問 25. これまでに看護系の研修を受けたことはありますか。

1. ある 2. ない

問 26. 研修を受けた方におたずねいたします。

1) 研修の主催はどこですか。(複数回答可)

1. 日本看護協会 2. 文部省 3. 厚生省 4. その他 ()

2) 研修を受講した動機をきかせてください。(主なもの1つ)

1. 内容に興味があった 2. 講師に関心があった 3. 教員になりたい
4. 人から勧められて 5. 日頃充分に勉強できない 6. 受講するのが当然だから
7. その他 ()

問 27. 本学看護学科に対するご意見・ご要望などございましたら自由に記載してください。

コンピュータ処理を行い、回答に協力していただいた方には後ほど結果をお知らせする予定です。
そして今後の教育活動に反映させていきたいと考えております。ご協力ありがとうございました。